あなたに出会えて

西山　純子

一、　萌黄色のカオスの中で

一枚の白黒写真に思わず見入る。

まだ幼児特有の甘い温かな匂いのしそうな小さな女の子。裾のヒラヒラした白地のワンピース姿で、靴は多分赤の革靴。

両肩に渡したトンボ取りの棒を担ぎアミも見える。

幼児はその自分の様子が嬉しいのか得意満面で、健康そうな足を広げ仁王立ちしている。

カメラのシャッターを切ったのは幼児の父親。よそ行きの服には不似合いかもしれないトンボ取りを持たせ、お洒落な服でポーズをとらせる演出は、小さなわが子とのひと時を楽しんでいたのだろうか。

父はどこかお洒落で、粋な独特のユーモアのある人だった。・

それは家族への配慮にも生活のペースにも現れていた。

父の影響は、後年になり幼児にも色々な面で受け継がれた。

幼児が生まれた時、その家には父母、兄、父方の祖母、そうして父の妹（幼児にとっては叔母）が居た。幼児は昭和二桁代の始め、初夏に東京淀橋区東大久保の閑静な一角で誕生した。戦争は始まっていたのだが、幼い娘にとって彼女を囲んでくれる家族は皆優しか

ったし、どんな時にも先ず娘を思って何事も優先順位の一番に置いてくれていたから、厭な思いをしたことはなかった。
父母は単にわがままな子に育てはせず、特に弱い人への優しさ、思いやりに関しては一貫して育くもうと願っていたようだ。
だが、その他の大人たちは愛らしい女の子というだけで、幼児を可愛がり育てた。
この環境が甘やかされて育った子ども特有の、わがままな少女にした要因になっているのは否めない。
戦争が激しくなった折に、父だけが東京に住み、他の家族は母の郷里富山県の（当時新湊という名称の）小さな町に暮らしていた。母方の祖母と姉が招いてくれて、この暮らしは終戦になり娘が中学二年生を終えるまで続いた。
その町は、新鮮な魚類に恵まれていた。食料難な時期ではあったが、そこで出会った多くの師や友人との交流は、成人になってから現在に至るまで続いている。
娘は、のびのびと育っていった。

二、　淡い黄色から桜色への招き

娘一家は地方の港街新湊から、父の見つけた千葉の出州海岸近く、千葉市神明町に転居した。

転校して間もなく、友人から「貴女の声に似合った歌を歌える場所がある、来ないか」と誘われ、娘が初めて教会に行ったのは中学三年になって間もないころだった。

その時、その礼拝堂に鳴り響いていたオルガンの音色と、讃美歌の抑揚のあるリズム、メロディに捕らえられ、その詩の言葉に、娘は心が震えるほど惹かれた。

もしあの時あのオルガンと讃美歌の歌声に出遭っていなかったら、娘の人生は全く違ったものになっていたであろう。当時娘には何もわからなかったのだが、この讃美の中に神の愛の導きを感じていたのかもしれない。ずっと前から神は彼女を見ていて下さり、この時の讃美歌によって何かを気づかせて下さったのかもしれない。

やがて高校生になり、教会学校の師の導きをいただき迷うことなく、洗礼を受けた。

大学生になっていく過程の中で、娘は多くの先輩や友人に出会った。

高校の帰りには自然に教会に集まって、週報作りの手伝いなどを皆でした。讃美歌を歌ったり、先輩たちがカール・バルト、キェルケゴール、ボンフェッファーなど、未知の世

界の話を論議しているのを耳だけ学問で興奮したり、感動したりした。クリスマスイヴにはキャロリングをし、寒さの中で星空を見上げ、イエス・キリストの降誕を下さった神の存在を身近に感じて次々と讃美歌を捧げた。

娘がこの時期に体験した大きなことの一つに、エッセイを書き、詩を紡いで認められ、大勢の前で朗読し、評価されることが折々あったことだ。褒められたことで娘は「書くこと」「あふれてくる言葉」は先天的に「娘の感性」であったのだろうか、次々と文にしていった。

信仰者としては殆ど未熟な無知なままであったにも関わらず、この時期に植え付けられたことが未来の娘の大きな基本になったことは、当人も周囲も予期しないことであった。

娘の前には、クリスチャンの青年たちがいつも居てくれて、青春らしい華やぎもあったのかもしれないが、娘の心を捉えたのはクリスチャンではない、一人の青年であった。

朴訥で静かな青年との出会いは、それぞれ別の関わりで誘われ出かけた辻堂海岸での遭遇であった。

海岸で小さな砂山を造り、砂を掻き出してトンネルにし、水を通している彼の様子や、砂で汚れた皆のサンダルや靴を水道で黙々と洗っていた姿が、娘の脳裏に何故か刻まれた。

不思議な出会いであった。・

三、　無色に近い未知の色

友人の一人が娘の話し声を聞いて、ある年の夏休みに「アナウンスアカデミー講座」の話をした。

「あなたは将来、その声できっと活躍する。基本を学んで自信をもって前進してほしい」と友人は熱心に勧め、当時は恵比寿にあるその会場に既に申し込んだと伝えた。娘は一瞬驚いたが、嫌いなことではなく、寧ろ好奇心が増したので、素直にその講座に赴いた。

現役のＮＨＫや民間のアナウンサーが毎回三名ほどで、受講生一人一人に丁寧な指導をしてくれ音読の発音、発声、速度、イントネーション、末尾の止め方の注意点など細部に亘り学べた。これは彼女にとって大きな蓄えとなり、後年の色々な場面で役に立っていった。

一方で、娘の母は家事を殆どしていなかった娘の将来を案じて、短期でも調理、洋裁和裁など基礎だけでも身につけたらと、一年間、その方面の学校にも通わせてくれた。残念ながら、それは殆ど無益に近かった。娘は速記しては皆に実技をし易くしたが、自分は身につけたものが少なかったのだ。

辻堂で出会った彼とは帰路が同じであったこともあり、ごく自然にゆっくりと友情をめ

ていた。
二〇歳の出逢いから数年後二人は結婚した。
娘には結婚観といったものがなかった。何も知らないで、現実的な計画的な生活設計ものはなく優しく誠実な彼と生涯を共にすることを少しのためらいもなく選んだ。娘は未知の世界に不安も恐れも抱かず歩み出した。結婚式のスピーチで「高価で華奢な器のような彼女を、君なら大切に守り、やがて共に使い込んで安定した良い器にするでしょう」というような言葉を下さった先輩が居た。「そうかなあ?」と当時感じただけの彼女も年月を経て、合点がいく思いをした。
平穏な家庭生活が続き、二人の子どもたちも生まれた。

十年後、突然母が亡くなり、兄が発病し父も病に臥した。
三年の間に三人は地上から居なくなった。
娘が初めて現実に眼を向け、夫となった彼と真剣に向き合い、家族がガッシリと絆を深めることを知ったのはこの時がスタートラインだった。

四、紺碧を願う中で

娘は三年の間に父母と兄を失った。わけの分からない、目的の見えない中でバタバタ脱兎のような勢いで走らされ、気づいてみたら三人の大切な、娘を育み愛してくれた人々が消えていた。

呆然というのは、こういうことか、夢を見ているのではないかと、娘は自分とどう向合って良いのか惑った。

教会の牧師や婦人たちが尋ねて来て、慰めの言葉や優しい心を示され、娘を少しでも気づけようとされた。

多くの人が手紙をくださった。その一人に教会学校のK子先生が居た。その手紙の中で書かれていたのが、優しい言葉と共に聖書の一節だった。

『あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである』

（コリント人への第一の手紙一〇章一三節）

この聖句はその後、娘も娘の家族も忘れられない言葉となった。

当時娘の家のすぐ近くで小児科医を開業していたM医院の院長もその夫人も、娘とは娘の母を通して懇意にしている間柄であった。

院長のH氏は娘に言った。

「貴女、何か思いっきり力入れてやれるものを探した方が良い。昼間、一人で家に居るのは良くない」と。

その言葉が引き金となり、娘の息子が通信で学習していた家庭学習の指導者になるよう勧められ、その講座を受け、試験をパスして、教室を開くことになった。

娘は二人の子の親になっており四二歳だった。

近所に教室を開設し多くの子どもたちと触れあい、特に娘の得意分野の国語に読書感想の指導に、読書の勧めに、医師のH氏の言葉通りに娘は力を入れる場があり、笑顔で生徒が親には話せないことも聞いて貰える先生になっていた。

三人の家族を失い鼠色に近い沈んだ色彩の漂いから、娘はいつの間にか紺碧に近い活力のある日々を歩いていた。

一番の理解者の夫が、高校生の長女が、あの子の親ならと良い模範になってくれた長男が、応援してくれて成立った教室であった。

五、黄緑と朱色があふれて

この時期の娘は、弱々しかった小さな花が適度な太陽に照らされ水もたっぷり貰って、少しずつ大きな花びらを咲かせていくようだった。

彼女の教室には幼児から高校生までの個性豊かな生徒たちが訪れていた。学習と共に、指導する娘の言葉や笑顔を通して、人としてどう生きるか、何が一番大切なことか、将来はどんな人間として生きるかなど学べた教室となった。時には談笑しながら心の成長に繋がる基礎となっていく時間が生まれていった。

彼女は外部の講師としても、時折依頼を受け、自分を振り返る時として感謝した。主として「読書と心の成長」の話をした。

良い気になっていたわけではなかったが、どこかでその空気があったのではなかったろうか？

五十代になって間もなく、夫は突然のように足の痛みに襲われ、診察の結果「リュウマチ」の病に侵されていた。夫の入院、息子は大学受験期に入り、父親の病状を考慮し国立大学だけを受験した。夫の居ない我が家で長女を含め母子三人で、肩を寄せ合って夕飯前にはひたすら祈った。その後、家族で夕食前に必ず声を出して娘が祈ることが日課になり

現在に至る。
娘の仕事は午後からであったので、早朝に家を出て遠距離の病院まで夫の様子を見舞い、そのまま仕事場に直行、坐ったとたんに「こんにちは」と元気な子どもたちの声がして、ホッと胸をなでおろしたことが多かった。
幸い夫のリュウマチは進行の早いものでなく、仕事にも復帰し頑健ではなかったが、定年まで勤務出来た。
優しい彼はそれからも娘の仕事に理解ある応援を惜しまなかったので、萎みかけた花は再び開花し六五歳まで続けられた。
息子が結婚したのはこの年月のほぼ中頃であった。
教会で出会った聡明な女性との婚約式、結婚式は忘れることのない感謝の一頁であった。
この開花した仕事、夫の発病、息子の結婚と共に長女の画家としての歩みに大きな進展が個展の積み重ねの中で、長女もまた仕事をしながら大きく歩みを確かな足跡として築いて行った時であった。
四〇代後半から六〇代前半、多難なこともあったが、様々な体験があふれるように与えられ、育てられ実力となっていった大切な「時」であった。

六、輝く紺碧の満ち潮

娘が、学ばされ成長を促されて地に足の着いた歩みを実感した年代六〇代後半から八〇代に至るまでの十数年は、彼女自身の努力による成長ではなかった。ゆっくりと生かされてきたキリスト教の信仰は、聖書の言葉、牧師による説き証し、大好きな讃美歌、教会に集う人々との交わりの中で、多くの学びや閃き導きがあった。

少女時代に増して活き活きと彼女の全身を貫き包み込まれて行った時と言っても過言ではない。

その時代には全国教会婦人会連合を知り、教会婦人会、教会役員会を深く体感し仕えさせ頂き、導かれた時でもあった。日本福音学校同窓会幹事として三〇年奉仕させ頂けたことも感謝であった。

夫がかなり重度な骨折をして以前のように簡単に快復が為せないと知った時、娘の脳裏に声がした。「今まで優しく愛をもってお前を見つめ支えてきてくれた彼に、いったいお前はいつそうするのだ？いつかではなく今ではないのか？」この言葉がその後の夫の介護に神が示されたこととして生きた。

介護生活の中で、さらに夫がどんなに大切な穏やかな愛の人であるかを改めて深く知っ

た。痛みの中でも彼は娘を労わることを忘れなかった。
未熟ながらも介護生活が身につき始めた、ある朝、娘は嘗て経験したことのない腰痛に驚いた。夫への介護の姿勢が腰に負荷がかかるものであったらしく、やがて腰を庇うために足をも痛めていった。
元来体質の頑健ではなかった娘は痛さに、思い通りに動かない体に思わず泣いた日もあった。特に朝は腰が壊れそうに痛かった。足はちぎれるのではないかと悲鳴が出た。娘は幼児期から今まで、優しくしてもらうことばかりに慣れていた自分が情けなく思い知らされていた。
しかし、その中でも着実に育てられていったのは、夫への彼女が出来る最大のこととしての笑顔での対応であった。それは無理な努力から出るものではなかった。
彼女が笑顔なら彼も笑顔だった。痛みの中で二人は手を繋いで帰路を歩いた学生時代のように気持が寄り添い合っていった。
彼とこうして過ごさせるこの時を愛しく胸いっぱいの感謝で満たされていった。
それは紺碧の空の下、愛に満ちた海原のように緩やかな歩みともなっていった。
今だから、いただいた二人の時とおぼえた。

七、大好きなたまご色　温かい希望

ワンピースからニョキッと短い足を出して、得意顔でトンボ取りを肩に立った写真の娘にも、いつの間にか晩年が来ていた。

そうだな・・・と娘はこの時を少し当惑しながらも、幸せな恵みの中に育まれた人生だなと振り返った。娘はヒーッと呻きたくなる痛さの中で、障害を持つ人、弱い体に苦しむ人の辛さ、痛み、苦しみを自分のこととして感じ、今までの無知を反省できたことは恵みと思えた。

娘には二人の子どもが居た。長女と長男、この二人を与えられたことの幸いを深くおぼえながら、ひとまず、この「百花繚乱」記を締めくくりたいと願う。

二人への手紙

『もし、私にあなた達二人が居なかったら、どんなに他の良いことがあったとしても、私の人生はつまらなかったろうと思う。何を一番にするかと言うと、先ずあなた達を下さった、そうしてあなた達が生まれる前に夫と出会わせてくださった神様への感謝だ。今までの歩みに多少の山や谷もあったに違いないのだが、優しいあなた達のお父さんのお蔭で、私はどの主婦よりも伸び伸び過ごせたように思う。最近あなた達と接していてあなた達の

中に、私にはない人間としての魅力を感ずることがある。あなた達が私の子どもであるという以前に人として大好きだなと思う。もちろんお父さんにもそれを感じる。

彼は今、弱い体力の中で生活している。当然私も、長女の貴女にも負担はある。貴女が居てくれなかったら私たちの生活は成り立たない。でも、私は弱い彼のお蔭で痛む脚腰も、疲れやすい体も、逆に保たれている。　私にとって大切な愛しい夫だと再認識する。

大好きな夫、長女長男、皆が好きな私は幸せだと思う。このようなことを感じられる晩年をいただけているのが、神の恵みだと心から覚えられることが感謝だ。

息子の貴方に言いたい。貴方の伴侶のNさんはどこかで私と似ている。「最終的判断が母さんと同じところに落ち着く」と、貴方は結婚前に言ってくれた。私もそう思う。そんな彼女が好きだし自然体で安心していられる。

孫のHくん、Mちゃん、それぞれにかわいい大切な宝だ。ピアノで全国レベルの受賞をしたりするHくん。奢らず飄々と勉学共に楽しみ頑張っているのが嬉しく好ましい。繊細な仕事も小さな指でこなせ、コツコツと学び生徒会役員としても活動しているMちゃんも楽しみだ。そうそう、幼児期には童謡コンクールに出場、審査を経て全国に放映されたこともあった。楽しい想い出をもらった。

二人とも優しい気持の持ち主で、それが本当に嬉しい。

今の私に悔いはない。
感謝することがこんなにあるのはすごいなと思う。
やがて時が来て、神の御手の中に憩わせていただけるまで、充分に心の余裕を持って歩いて行きたい。
娘の貴女が弟の家族一人ひとりと、末長く仲良く感謝と豊かな交わりの中で幸いに過ごしてくれるのが、今、私の願いの一つだ。
美術を専攻し、芸術家として生きることには至難なこともあるだろう。けれど、貴女ならやり抜けると思う。私は貴女の真の幸せをずっと祈り願い続けている。
たとえ、今すぐ天国に迎えいただけても、後悔や思い遺すことはない。
神の御心なら、あなた達のお父さんを天国に見送ってから、ゆっくり地上を発たせていただけたらとも思う。これはわがままだが。
脚腰痛の日々、夫の介護の日々にもかかわらず、この感謝と幸い、満たされた想いを折々与えられるのは何故だろう。その答えは一つしかない。
私の声を聴いて教会に誘ってくれた友を遣わされ信仰を与えられたことにある。
今、私は一見、痛みや弱さや外部との接触の少ない不自由さを負っているように見える。それが常には哀しくない、重くはない、寧ろだから優しさが身にしみ、温かさに包まれる。

あなたたち皆に、この感謝の信仰を心から伝え、遺していきたい。
母は子どもみたいにわがままな点もある、けれど素直に信仰を抱きつづけ恵まれた人だったと、そう思ってくれたら感謝だ』
娘は、こう書けたことが何よりの「百花繚乱」の中心に咲く、枯れることなく、萎れない永遠に咲く命の花とおぼえる。
アナウンスアカデミーに申し込んでくれ、後に朗読や子どもたちへの読み語りに多く用いられた喜びを、誘導した友が居たのも不思議な出会いであった。
牧師のメッセージが、私の為に日々祈り励まし、メールをくださる友の言葉は真実の神の愛をそのままに伝えくださる思いがする。
どんな時にも感謝し、自分の意志や願いに重きを置かず、人間として多くを求めず緩やかに笑みつつ歩こう。全ては神が決めて下さる、そう心に決めた時から娘は平安で感謝の多い日々をいただいている。
淡いけれど清廉なたまご色、目立たないけれどホッとする姿の花々。娘はそんな花の一輪になれたらと笑顔で軽やかに願った。

ひとまず　完

愛唱聖句

＊詩編　九六編三節
新しい歌を主に向かって歌え。全地よ主に向かって歌え。
＊ヨハネ　九章三節
神の業がこの人に現れるためである。
＊第二コリント　一二章八節
力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。

愛唱讃美歌

＊讃美歌三三八主よ、　おわりまで　仕えまつらん
＊讃美歌　四五二　ただしく　清くあらまし